

## 主 題：クリスチャン ⑦

## 聖書箇所：I コリント人への手紙 1章 7節

どうぞ I コリント 1章をお開き下さい。

パウロは我々クリスチャンがどんなに大きな祝福をいただいたのかをいま一度思い起こさせようとしています。なぜなら我々が神様からいただいた祝福を覚える時に、それが私たちの生活に反映して行くからです。神様の恵みを覚えている人たちはその恵みにこたえようとします。神様の恵みに感謝している人はそれを生活で表して行こうとします。ですからパウロは、コリントの教会に対してあなたたちが神様からどんなに大きな祝福をいただいたのかしっかり覚えなさい、忘れてはいけないうして、この1章にそのことを記しています。

## 8. 神の再臨を待つ者 7章

我々は神様がクリスチャンに与えられた10個の祝福を見ていますが、きょうは八つ目、神の再臨を待つ者としてくださったということです。7節「その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。」と、あなたは主の再臨を待つ者に生まれ変わったと言うのです。

## (1) 「主イエスの再臨」

主イエスの再臨、この7節では「現われ」ということばを使っています。このことばは新約聖書の中に18回出て来て、その中の8回は「啓示」と訳しています。3回は「黙示」、残った7回が「現われ」と訳しています。みんな共通しているのです。隠れていたものが明らかにされるということです。この啓示や黙示というのも、人に隠されていた神の真理を神ご自身が明らかにされる。だから啓示であり、だから黙示なのです。人間がどんなに努力をしても得ることのなかった真理を神ご自身が明らかにしてくださる。それがこの啓示であり、黙示です。我々はイエス・キリストを信じていますが、イエス・キリストにお会いしてその御顔を見たことはありません。イエス・キリストのみからだに触れることもありません。つまり私たちから隠されていたものが後に明らかにされるのです。私たちは、この目で主イエス・キリストを見るのです。私たちは主にお会いしてその御顔を拝します。その希望が私たち信者に与えられた。

## (2) 「主イエス再臨の目的」

主イエス・キリストはこの再臨について約束を与えられました。何のために主が再臨なさるのか——。今特に二つのことを私たちはご一緒に見たいと思います。

## ① キリスト者をご自分のもとへ迎えるため ヨハネ14:3b

一つは私たちをご自分のもとに迎えるためにです。皆さんも覚えておられると思いますが、イエス様がこれから十字架に架かって行かれるという話をされた時に、一体どこに行くのだろうと弟子たちは不安がりました。いつもそばにいてくださった主が自分たちのところから出てどこかへ行かれると。その時にイエス様は「心を騒がしてはなりません。……わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。」と言われました。主イエス・キリストは弟子たちに対して私はあなたたちのためにすばらしいことをするために、あなたたちのところからいなくなるのだ。この後十字架に架かって、三日後によみがえってという話をされました。何のために——。あなたを天国に迎えるために、あなたのために住まいを設けるためであると。その後でこう言います。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と。ですから感謝なことに神様は私たちをご自分のもとへと迎えてくださると。いつか私たちはこのすばらしい主イエス・キリストにお会いします。そしてこの方とともに永遠を過ごすのです。そのために約束されたように主はあなたを迎えに来てくださると。

## ② キリスト者に報いを与えるため

もう一つの理由は私たちに報いを与えるためです。あなたの信仰の働きに対する報いを、褒美を与えるために主は帰って来られると。黙示22:12に「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」という約束があります。少しわかりにくいと思いますが、この12節のみことばを原語から直訳すると、「見よ。わたしはすぐに来る。わたしの報いを携えて来る。わたしは彼が行なったことに対して報いる」と、こんな訳になります。「彼」と単数を使っているのは、神様はひとりひとりが行なった働きに対して報いを与えられるからです。あなたたちにと言わなかった。それぞれひとりひとりに、あなたに対して神は報いを与えてくださる。だから私たちはこの地上にあって、今神様の前を正しく歩んで行くという責任を負っています。

パウロが土台の上にもいろいろなものを用いて建物を建てた話をしました。同じ土台の上にある人は金とか銀とか宝石を使って建物を建てた。ある人々は同じ土台の上に木や草やわらを使って建物を建てた。同じ土台の上

ですから、クリスチャンの話です。クリスチャンたちが建物を建てた。違っていたのは素材でした。そしてその後こう言います。「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」、つまり神の前に立った時に、ひとりひとりの主のためになしてきた働き、信仰者として、クリスチャンとして歩んできた信仰生活の真価が問われると。自分は家を建てた時に、草で建てていると思っていないでしょう？わらで建てていると思っていないでしょう？しかし、さばきの時にはそれが明らかになるのだと言うのです。神様の火によって、心のすべてをごらんになっている神様がそれぞれの働きに対して正しい評価を下されるというのです。奉仕や働きに、主の前に価値のある働きと価値のない働きがあるということをご存じだと思います。いろいろな働きをしているかもしれない、一生懸命奉仕をしているかもしれない。でも神がお喜びにならない奉仕と神がお喜びになる奉仕とがあるのです。どうやって見分けるかという、その鍵はあなたはだれのためにその働きをしているかです。一体だれのためにその働きを、奉仕をしているのか。そのことを私たちは考えることです。もし人目を気にして、人から褒められたいという思いを持ってやっているのだったら、残念ながら人からの称賛はあっても神からの称賛はないのです。

マタイ6:1の山上の説教の中でイエス様は言われました。「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」と。神様が言われているのは、あなたは一体だれのために奉仕をしているのか、だれのために生きているのか——。仕事にしても、勉強にしても、家事にしても、ありとあらゆることを一体あなたはだれのためにやっているのかと神様は問われます。もしあなたが心から神のためにやっているのなら、神様はそれを覚えてくださり、それにふさわしい評価を与えてくださる。外側から見た限りでは、どちらも奉仕しているし、どちらも働いているけれども、ある人々は人から褒められたいと思ってやっているならば、素晴らしい働きであっても、残念ながら神ご自身はお喜びになっていないということです。まさに木や草やわらで建てたということです。

しかし、あなたが本当に主を愛して、主に感謝をして、主のために喜んですべてのことをしているならば、その働きに対しては主が大いなる祝福を与えてくださる。まさに金や銀や宝石で建てたということです。問題は私たちの心です。福音宣教というのは神様が我々救われた者たちに対して与えられた素晴らしい特権ですがけれども、パウロ自身は「私が福音を宣べ伝えてもそれは私の誇りにはなりません。それはどうしても私がしなければならないことだ」と言っています。。福音を伝えることに関してそう言ったのです。そのパウロがⅠコリント9:17「もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがあります。」と、ちゃんと彼はここでも教えるのです。我々が喜んでそれを行っているのだったら、神の前にそれは価値あるものとして認められるけれども、我々が義務からやっているのだったらそうではないというのです。だから問題は私たちの心が伴っているかどうかです。主を愛して、主に感謝して、喜びを持ってその働きをしているかどうかです。主に仕えているかどうかです。信仰者の皆さん、ぜひ覚えてください。あなたはだれの目を恐れて生きています？神様の目を恐れて生きているのか、それとも人の目を恐れて生きているのか。いずれあなたも私も間違いなく、例外なくこの神の前に立ちます。この方があなたに対して報いを与えてくださる。この方はあなたの心をごらんになっておられる。ですから私たちはそのために今から価値ある歩みをして行くことが必要です。見せかけだけの働き、奉仕、これは神の前に価値のないものです。

願わくば我々ひとりひとりが、何をなすにしても私たちの動機を吟味する者になりたいです。いつでも私たちが何かをする時に、自分に問いかけるのです。おまえはだれのためにやっているの？何を期待しているの？と。仕事でも勉強でもすべてのことを神様、あなたを愛するから、あなたのために喜んでやりたい、あなたのために一生懸命やりたいとするならば、神様はそれを喜んでくださる。たとえ家事であったとしても、神様は神のためになしたみわざに対して、それにふさわしい報いを与えてくださいます。どんなに自分がよいと思うことをしていても、主が喜ぶことをしていなければその働きは無価値であると。こんなに一生懸命奉仕をしているのではないですかと、自分がよいことをしていると思っても、問題はそれによって主が喜んでくださっているかどうかです。でなければ意味がないと言うのです。

では、神様が私たちに何を求め、そして何を喜びになるか——。神様のおことばに従って行くことです。それがすべてなのです。よく教会の中にあって、教会の教勢を伸ばすためにいろいろなプログラムを導入するところがあります。プログラムが悪いと言っているのではないのです。大切なことはプログラムを導入することよりもひとりひとりが神のみことばに従って行くことです。あなたがそのようにして、神の前に正しく歩んで行くなれば、確実に神様はあなたを祝してくださり、あなたを用いてくださる。その一番大切な部分を横に置いて、いろいろな方策をもってただ教会の教勢だけを伸ばそうとする。残念ながら、神ご自身そういうことを期待しておられない。だって教勢を伸ばして行くのは神のみわざです。人が救いに与って行く神のみわざです。あなたや私に託された責任というのは神様のおことばに対して忠実に従うかどうかです。みことばを愛して、みことばの教えに従って行くとする、それを神がお喜びになる。そこに私たちの満足はあるのです。

ソロモンは箴言13:13で「みことばをさげすむ者は身を滅ぼし、命令を敬う者は報いを受ける。」と言っています。そのとおりだと思いませんか？神の命令を心から敬う者、神様の教えを心から愛する者たち、また愛している者たちはそれを実践しようとするからです。また、同じ箴言13:21に「わざわいは罪人を追いかけて、幸いは正しい者に報

いる。」とあります。つまりあなたがわざわざいか、神様の幸せか、どちらを受け取るかは、すべてあなたがどう歩みをするかにかかっているという話です。みこころではなくて、罪のうちを歩む者にはそれにふさわしいわざわいが伴います。しかし、もしあなたが主の命令を愛してそれに従って行こう、神の前を正しく生きて行こうとするならば、あなたには必ず神の幸い、幸せが与えられると。

驚くべきことに、旧約聖書のみことばを順番に見て行っても、神様は同じことを言われています。今朝、申命記27、28章を読んでいる時にも同じことがありました。ちょうどシナイ山において神様がイスラエルと契約を結ばれた時に神様が彼らに言われたことは、私に従う者には神様の祝福がある、でも神に逆らう者には呪いがあると。メッセージは変わっていません。神様によって救いに与った皆さんが、神のみことばを愛して、みことばに従うなら、神様はあなたを豊かに祝してくださる。でもこのみことばに逆らうならば、それにふさわしい報いがあなたに訪れると。我々信仰者は、神様によってこの救いに与った者です。だったらしっかりと主の前に立つ日を覚えてきょうを生きることです。我々が覚えなければいけないのは、あなたも私もみんな例外なく主の前に立った時に、主ご自身があなたの信仰者としての歩みに対して何と言われるかです。「よくやった」と言ってくださるのか、「よくやった、よい忠実なしもべ」と続きます。神があなたに期待しておられるのは、主のみことばに忠実に従って行くかどうかです。そして神が評価なさるのは、私のみことばに従って来たかどうかです。ですから我々は主の前に立ち、主から報いをいただくことをしっかりと覚え、神様が望んでおられるように、神がお喜びになるようにみことばに従い続けて行くことです。それが神の前に価値ある生き方であると。

### (3) 「主イエスの再臨の確実性」

パウロはこうして主イエス・キリストの再臨について教えました。主が再臨なさる目的を見て来ました。そして、私たちはこのみことばの中に、主イエス・キリストの再臨の確実性を見ます。ただの戯言ではないのです。確実に主イエス・キリストは帰って来られます。恐らく聖書を読んでおられる皆さん、聖書を愛しておられる皆さんは、今私たちの周りに起こっている出来事を見た時に、確かに聖書が教えるように今、世の終わりだということはわかりになりますよね。今我々の周りで起こっていることを見てください。聖書が教えるように、私たちは確実に世の終わりに向かっています。だってそのように主ご自身が約束されたからです。パウロはピリピ3:20で「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と書いています。パウロ自身が私の住まいは天国にあると。きょう死んでも、私は生きてイエス様とともに天国で過ごせるのだという希望を持っていました。その日を待望していた様子が今の箇所にも記されています。イエス様が迎えに来てくださるのを私は待ち望んでいると。

ローマ8:19に、主イエスの再臨を待っているのはパウロだけではなく、実は被造物でさえも同じようにその再臨を待っていることが記されています。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。」と。ここにも「待ち望んでいるのです」と出て来ます。先ほど読んだピリピ3:20にも「私たちは待ち望んでいます」と同じことばが使われています。この「待ち望んでいる」というのは、期待を持って待っていること、忍耐を持って待っている様子です。もうある準備ができています。ですからこの「待ち望んでいる」というのは、主イエスが帰ってくるための備えがもう十分にできています。

そして、「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいる」と言うのです。これは首を伸ばして待ち望んでいる、待ち切れない思いで待ち望んでいること、つま先で立って、まだかまだかと待っている様子を表したことばです。いつもどこかに出かけると、一番ハイライトの場面は伊丹空港に帰って来る時です。伊丹に帰って来ると、荷物を受け取って外に出て行くわけですがけれども、そこに扉があって、そこを出たらたくさんの人たちが待っています。その扉を出て行く時、私は私を迎えに来てくれる愛する家族を探しています。家族は家族で私が出て来るのを待っています。おととも空港に着いて、荷物をピックアップしている時に電話が入りました。「まだ着いてないの?」、「今、荷物を取ろうとしてる」、「わかった待ってる」と。そして出て行くと、そこに首を長くして待っていてくれる家族がいます。まさにそれを表したことばなのです。被造物は何をしているかという、被造物はまだか、まだかと主の再臨を首を長くして、まだその日が来ないのか、それを待ち焦がれているという様子を表しているのです。だって、そのことは主ご自身が約束したことだからです。先ほど見たヨハネ14章の中でイエス様は「あなた(のため)に場所を備えたら、また来て、」と言われた。主イエス・キリストはあなたのために住まいを備えたら、またあなたを迎えに来て来ますと言われた。主なる神が言われているわけですから必ずそのようになります。必ず主は再臨なさいます。

### ② 天使の証言

また同時に、天使たちもそのことを証言しました。使徒の働き1章に出て来ますけれども、イエス・キリストがオリブ山から天に凱旋して行った時に、イエスが昇天して行く様子を見ていた弟子たちに対して天使は、使徒1:11「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」と言います。確かに我々イエス・キリストによって救われた者たちはその日を待っています。主イエス・キリストがあなたを迎えに来てくださる。その時にあなたはあなたを愛する主にお会いします。

アメリカで車を走らせていると、いろいろなところにビルボードがあって、そこにいろいろなサインが出ています。この間、こんなビルボードがありました。イエス・キリストの十字架の横木が描かれていて、そこにくぎがあって、そこには血の跡が残っています。そしてその下に「あなたはこれほどの愛をもって愛されている」と書かれています。イエス・キリストの十字架、あなたの罪の身代わりとして死んでくださったイエス様、ご自分のいのちを犠牲にしてまであなたに主の愛を示してくださいました。それはあなたを罪から救い出すためにです。その主に私たちはお会いできると。そのような素晴らしい希望を神様は与えてくださった。被造物はその日がまだか、まだかと待っていると。問題は、私たちがそんなふうにいるかです。私たちは主にお会いした時に、主から私たちの信仰者としての歩みの評価をいただきます。よくやったと言ってくださるのか、どうなのか。でもまだきょうというこの日が与えられている以上、自分の信仰者としての歩みを振り返ってみてまず良かったなと思うのだったら、少なくともきょう悔い改めて正しいことを行なうことができます。過去はもう終わったのだから振り返っても仕方がない。問題はきょうです。明日があるかないかわかっていない。どのように私たちがこの日を生きるかです。しっかりと主の再臨に備えた生き方をきょうすることです。

#### (4) 「主の再臨に備えた歩み」

そこで、もう一カ所皆さんとみことばを見たいのですが、テス2:11-13、主の再臨に備えた歩みの話です。パウロはここで三つのことを教えようとしています。一つはクリスチャンというのは新しいいのちを得た者たちであると。二つ目はクリスチャンというのは新しい生き方をする者たちであると。三つ目にクリスチャンというのは新しい希望を持った者たちであると。

##### ① 「新しいいのち」:「すべての人を救う神の恵みが現れ」

クリスチャンというのは新しいいのちを得た者たちである。「:11 というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ」とあります。この「救う」ということばは、解放するとか、救助するとか、救済するということです。一体何からあなたを救おうとしておられるのか——それは罪からです。あなたの罪のさばきからです。罪を犯し神に逆らっているあなたのその呪いからあなたを救い出すためにです。あなたをとらえているその罪の束縛からあなたを救い出すために、神様はあなたに救いを与えてくださいました。我々みんなその救いに与ったのです。かつて生まれながらに神様に逆らい罪の中を自由に歩み、人生なんて一回きりだから、生きている間に楽しめばいいと。それで人生が終わるのではないということをみんな忘れていました。ひとりひとはみんな神の前に立つのです。そしてあなたの考えたことも、あなたの行なったことも、あなたの口にしたこと、すべてを知っておられる神の前で審判を受けなければいけないのです。だれひとりとしてそこから逃れることができない。そして神の救いを拒み、神に背を向け、神に逆らい、神の憎むことを平気で行なってきた者たちには必ず永遠のさばきが約束されています。でも感謝なことに神様はそこからあなたを救い出してくださると。

##### a. 「救いは、神の恵みによってのみ与えられる」

では、何によって救いに与るのか、どのようにしてあなたはその救いに与るのかです。行ないではありません。どんなにいい人間になろうと努力してもそれは無理です。自己満足はできても神を満足させることはできないのです。神が備えてくださった救いというのはここにあるように恵みによってです。神が救ってくれるのです。あなたがそのことを求めるならば神が赦してください。

##### b. 「救いを与える神の恵みが人としてこの世に来られた」

そして、11節の後半を見ていただきますと、神の恵みが与えられたとは言っていない、「神の恵みが現われ」たのです。イエス・キリストご自身が神の恵みなのです。私たちが受けるにふさわしくないこの救いを与えるために、神の恵みであるイエスが人となってこの世に来てくださり、あなたのすべての罪を負ってください、そして身代わりとなってあなたが受けなければいけない罪のさばきを代わって受けてくださった。そして神はあなたのために素晴らしい救いを用意してくださいました。神が恵みなのです。この方が恵みなのです。この方があなたに一番必要な救いを与えるために来てくださったお方であると。そのことをパウロはまずここで教えました。

##### ② 「新しい生き方」——生まれ変わった人生 12節

##### a. 罪を捨てる

そして、クリスチャンというのは新しい生き方をする者になったと言うのです。「:12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て」とあります。まずこの12節を見る時に、最初にパウロはこのクリスチャンたち、神様の救いに与った者たちは、救われたその瞬間からあるものを捨て続けて行こうとすると言うのです。あるものから離れ続けて行こうとすると言うのです。あるものに背を向け続けて行こうとすると言うのです。それは「不敬虔とこの世の欲」なのです。それを捨て続けて行こうとするのです。

「不敬虔」というのは、神様に対する罪の話です。神を信じようとしない、その心です。

そして、「この世の欲」というのは、詳しい説明をするまでもありません。我々が愛して、私たちが歩んで来た歩みを見る時にそれは明らかです。みんな我々は、この人生は自分のものだと思っていました。好きに生きたらいいんだと思っていました。自分を楽しませればそれでいいんだと思っていました。神のことなど無視して、神に背を向けて、そして自分の好きなように、自分を満足させるためだけに生きて来た。クリスチャンというのはそういう

かつての生き方から離れて生きたいと願って、離れて行こうとする者たちだと言うのです。神様に背を向けて、神に対して不信心な思いを持って神様に逆らい続けて行く生き方がいかに空しいのか、その確信を持っています。こういう生き方をしてはいけないし、こういう生き方をしたくもない。そして、さまざまな罪の中を思いどおりに生きて行くという生き方に対しても、もうそういう生き方はいいと、その生き方がもたらしてくれたのは空しさであり、その生き方がもたらしてくれたのは永遠の滅びであると。そういう生き方から離れようとする。

#### b. 神が喜ばれることを選択して行なう

かえってこういう生き方を始めるのです。12節後半に「この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」とあります。生き方が変わったのです。神に逆らう生き方から離れて、神を喜ばせる生き方を始めたと言うのです。この「慎み深く」というのは賢く生きるとか、賢明に生きるとか、冷静に生きるという意味です。国語辞典では過ちのないように行動を控えめにするという定義があります。だから正しい歩みをして行くためには知恵が要るわけです。神様の知恵をいただいて賢く生きて行くということです。「正しく」という意味は今も見たように神様の前に正しく生きて行こうとするのです。「敬虔に生活」するというのは、神様を敬う生き方の話です。神が喜ばれることを考えてそれを選択して行こうとするのです。神様の栄光が現わされることを考えて、そのように生きて行こうとするのです。ですから、神を悲しませるような、神がお喜びにならないような生き方を捨てて、神が喜ばれる生き方を選択して行こうとする。しかも12節の終わりに「生活し、」ということばが出ています。これまで「慎み深く」とか「正しく」とか「敬虔に」とか全部副詞でした。この「生活し、」だけ動詞です。つまりこのように生きて行くという話です。どれだけのことを知っているではない、こういうふう生きて行きなさいと。そしてこういうふう生きて行く者へとあなたは生まれ変わったのだと言っているのです。ですから、パウロはこの12節のところで、クリスチャンというのは新しい生活をする。完全ではないけれども、神がお喜びにならない生き方から離れて行こうとするし、かえって神がお喜びになることを考えて、そういう生き方を選択して、そのように生きて行こうとする。これがクリスチャンなのだ。これが救われた人たちの生き方なのだと言うのです。

#### ③ 「新しい希望」 13節

そして三つ目に、最後の13節のところに新しい希望についての話が出ています。「13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」、つまりパウロはここでクリスチャンというのは新しい希望を持って生きる者へと生まれ変わったと言っています。そしてここに「教えさとした」という動詞が出て来ます。これは何か教えるとか、何々するように指示をするとか命令をするという意味です。ということはパウロは12節からこういうことを言わんとしたのです。今見て来たように、主は救われた者たちに新しい生き方をしなさい、新しい希望を持って行きなさいと教え、命じている。そのような生き方をあなたはなすことができるのです。神に背く生き方をやめて神がお喜びになることを選択して、そのように生きて行くのです。そういう生き方ができるのだということをパウロはここで明らかにしているのです。パウロは命令を与えたのです。命令を与えたということは、それが実践できることだからです。選択しなさいと言うのです。あなたはそれができるのです。できるから、そのように生きて行きたいと選択すると言うのです。

そして、パウロは確かにこの13節で「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを」とイエスの再臨の話をする。しかしここで言っている彼の希望は、今までに見て来たように、私は死んでも生きるのだ、天国で永遠を過ごせるのだという希望ではないのです。確かにそれも希望です。そして私たちは死んだ後、主の前に立って、クリスチャンとして歩んできたその歩みに対する神様の褒美があるということも確かに我々の希望ですけれども、パウロはここでそれを言っているのではない。ではここでパウロが言っている希望とは一体何か——。それは罪のからだからの解放の話です。罪のからだから解放されるという話です。

救いに与った私たちは、確かにパウロが教えてくれるように新しい願いを持って生きて行こうとします。神様を喜ばせたいという思いを持っている。ですから皆さんは神様がお喜びになることは何かを考えて、それを実践して行こうとする。神のみことばを聞いた時に、神はこういうふう生きて行きなさいと言われたから、私はそんなふう生きて行きます、どうぞ助けてくださいと、そのような選択をもって皆さんは歩もうとされる。しかしそのような願いがありながら、現実とはいうと、我々は失敗の連続です。やりたいことをやっているのではなくて、やりたくないことをやっています。神を喜ばせることよりも神を悲しませることを私たちは選択してしまったりする。そうして自分を見つめて、自分に嘆いている人たちはみんな、主よ、早くこの罪のからだから解放されて、罪を犯すことのない栄光のからだをいただきたいと思うのです。パウロはそのことを望んでいるのです。神を喜ばせたいという思いをいただいた信仰者たち、神を喜ばせたいと思い、そのように生きようとするほど、自分がそのように生きていないということに気づかされて行くのです。その時に信仰者たちはみんな神様、早く約束された栄光のからだをいただきたいと思うのです。ですから、ローマ8:23には、「御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」とあります。神様、早くこの罪のからだから解放していただきたいと。そして栄光のからだをいただきたいと。なぜなら栄光のからだをいただいたら、もう二度と神様を悲しませることがないからです。

パウロは天国が私たちの国籍なのだという話をした後、同じようにピリピ3:21で「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」と書いています。「万物をご自身に従わせることのできる御力によって」、この方は神ゆえに、この方に勝る力を持っている存在はどこにもいないのです。その方がご自身の御力によって、罪に汚れたあなたや私のこのからだを栄光のからだへと変えてくださるということです。確かに私たちの内側は清められました。残念ながら、私たちにはこの肉が残っています。ですから、その罪のからだは栄光のからだへと変えられることを待っている。そして確実にそのことは起こる。神がそのことを約束され、そして私たちにその栄光のからだを与えてくださる。パウロの希望はそこだったのです。パウロはその日を待っていたのです。確かに私は天国に行って、主イエス・キリストを目の当たりにし、イエス様とともに永遠を過ごすのだと。確かに私は主イエス・キリストの前に立って私はこの方から報いをいただくのだと。しかし、それ以上に私が待っているのは、この罪のからだから解放されることだと。

確かに先ほど見て来たように、天国に私たちの国籍があると、神様は私たちの歩みに対して褒美を与えてくださる。確かにそれはある種の動機を私たちに与えてくれます。もっと神様に喜んで従って行きたいという思いを私たちに下さる。でも、天国に行って神様から何の褒美をいただかなくても、忠実に従って行きたいという思いは変わらないでしょう？褒美を下さるから、では一生懸命頑張らしようというわけではない。なぜなら私たちは神様からもうすばらしい祝福をいただいたのではないですか。我々の罪は完全に赦され、私たちは生まれ変わったのです。私たちは確実に天国に行ける者になったのです。私たちは日々神様と交わりながら、この神とともに生きることができる者になったのです。全能の、全知の神が私とともにいてくださるのです。この方が私を弁護してくださり、この方が私を祈ってくれているのです。神の祝福を覚えた時にそれ以上何を期待します？神様、もう褒美なんて私には要りません。なぜかという、あなたがたくさんの祝福を下さり、こうして主に仕えることができるのもすべてあなたの恵みです。あなたが助けてくださっているから、あなたに従って行けるのです。あなたが助けてくださっているから奉仕ができるのです。あなたが助けてくださっているからこのように生きることができるのです。すべてあなたの恵みです。神様、我々は褒美をいただく資格なんかありません。あなたによって救われたことを感謝しています。そしてあなたにお会いする日が来ることを知っています、その日が早くあってほしい。そして早くあなたにお会いしたいのは、その時が来れば、もう私はあなたを悲しませることがないから。

信仰の勇者たちはそのようにして生きて来たのです。この罪のからだから解放される日がやって来るのだ。その希望を持って彼らはその日を主に従い続けて来たのです。パウロが教えるように、神様はあなたを生まれ変わらせてくださった。罪を赦されたあなたは生まれ変わりました。そしてあなたに新しい生き方を神様は与えてくださった。それがクリスチャンなのです。生まれ変わった者たちは、今パウロが教えてくれたような生き方をする者として生まれ変わったのです。こういう生き方をするから救われるのではない。救われた人はそういうふうにして生きて行こうとするのです。罪から離れようとするのです。その罪は神を悲しませるからです。そして、神がお喜びになることを選択しようとするのです。なぜなら私たちは神を喜ばせる者として生まれ変わったからです。しかし、残念ながら喜ばせたいと願っていながら、現実には余りにもそれとかけ離れているので、私たちはこのからだを贖われることを待っているのです。この罪のからだから解放されて、栄光のすばらしい、罪を犯すことのない、神を悲しませることのないからだに変えられる日を。

皆さん、その日を待っています？今の苦しみからの解放、それもあなたのうちにあるかもしれない。でもそれだったらあなたの心の中に喜びはないです。我々クリスチャンの神様からいただいた恵みの一つというのは、我々の重荷を全部自分でしょい込むこともできるし、全部神様に委ねることもできるのです。神様が言われたのは、そうやって生きて行きなさい、私があなたのことを心配するからと。自分で心配してもいいけれども、残念ながら自分で心配してもできないことがいっぱいあります。だったら全能の神様に委ねることです。そうして我々はこの地上を生きて行くのです。神が喜んでくださることを選択しながら。そして我々は確実にこの方にお会いします。愛していのちを捨ててくださったこの主にお会いします。そしてこの方とともに永遠を過ごす。その日を心から、つま先で立って、まだか、まだかと待ち焦がれるようにして今日をしっかりと生きることです。主は帰って来られる。そのためにしっかりときょう備えを持って生きることです。

皆さんは主イエス・キリストにお会いする備えをしておられますか？神の前に悔いのない歩みをしておられますか？神の前に本当に価値ある歩みをしておられますか？そうだったらそのように歩み続けてください。もしそうでなければ、その罪を悔い改めて、きょうこの与えられた日をそのように歩み始めてください。主にお会いする、その日を待望しながらこの希望をいただいた者にふさわしい生き方を今から始めることです。そうしてその日を待ちましょう。主は必ず帰って来てくださる。

#### 《考えましょう》

1. パウロが主の再臨を待ち望んでいた理由を記してください。
2. テトス2:11-13でパウロが教えていることを説明してください。
3. クリスチャンに良い行いが要求されるのはどうしてですか？
4. あなたは今日からどのように生きて行こうと決心されましたか？